立正大学博物館 館報

万吉だより

MA GECHI NEWS

第４号　平成17(2005)年３月

大学設置博物館の意義

館長　坂誥秀一

開館２年目に「博物館に相当する施設」として埼玉県教育委員会から指定された立正大学博物館は、相応の実績が評価された結果であった。大学付置の博物館が、博物館としての市民権を得たことになり、名実ともに立正大学を冠した博物館として認められたことになった。

立正大学創立130周年記念として開設された当館は、大学、とくに史学科に関係してきた教員、史学科に学んだ学生にとっては、待望の施設として歓迎された。全国各地に散在している多くの卒業生は、大学の広報、同窓会・父兄会の案内をはじめ、史学科関係の活動情報などによって博物館の開設を知り、見学の照会があいついだ。一方、新聞報道などによって立正大学に新しく博物館が開設されたことを知って見学に熊谷キャンパスを訪れる人も増し、さらに、埼玉県をはじめ近県の高校からの見学希望もあって、盛況を呈した。

博物館の開設は、立正大学博物館学芸員課程に学ぶ学生諸君の実習の場としても機能するところとなり、教育の施設としての活用も果されてきたのである。

このような公開と活用は、立正大学の「知的財産」の一部を学の内・外に公開すると共に研究の情報を広く発信することに連らなっていった。

春の企画展、秋の企画展の開催にあわせて実施された講演会には、学外から多くの人びとが来学され、展示会ともども熱心に主催者の意図を理解され、声援を頂いてきた。

あわせて、『立正大学博物館要説』（B5・32頁）を案内パンフレットと共に印刷配布し、館報『万吉だより』（A4・８頁）を作成して館の日常的な動きを伝え、また『年報』（B5・36頁）によって年次ごとの報告を果してきた。さらに、大学博物館としての特性を活かすべく『館蔵資料「基礎文献」叢刊』と題するシリーズの刊行を実現した。このシリーズは、当館収蔵資料のなかで、学界そして一般社会に著名な資料に関して発表された主な論文と報告を一書に収録し、収蔵そして展示の資料をよりよく理解して頂くための一助として企画されたものであった。これらの印刷物によって内・外の有識者をはじめ、参会者各位の理解が深ってきた。

大学における博物館は、収蔵資料をただ陳列して公開する視点に加え、それぞれの有する学術的な意味を知って頂くこと、換言すれば、大学のもてる「知的財産」の一つとしての資料を広く公開すると共にその意義付けを情報として提供することが肝要であり、あわせてそれらの活用を試みることも求められる。

博物館、それは単に資料を並べるだけでなく、資料のもつ意味を研究の結果を下敷きとして観る人びとに感銘をもって頂くことが求められなければならない。

立正大学博物館は、大学の博物館としての視角を標榜して館活動を展開していくことが要請されるのである。

立正大学博物館に期待する

近藤信義

この夏、３度目になろうか、ドイツの友人を訪ねて10日ほどミュンヘンの郊外で過ごした。夏休み前に館報『万吉だより』への記事依頼という宿題を頂いていたこともあって、いくつかのMUSEUMを訪ねてみようと考えていた。

ミュンヘンを代表するMUSEUMはなんと云ってもピナコテイク・トリオ。つまり、アルテピナコテイク、ノイエピナコテイク、ピナコテイク・デア・モデルの三つのMUSEUMであり、三つ目は2002年に開館した最新のものである。こうした美術系以外にもMUSEUMはミュンヘンには実に数多くある。ある意味では古い建築が残されている一帯は街全体がMUSEUMのようであるし、レジデンツに入れば内部の装飾全てがMUSEUMといえる。

出がけにMUSEUMという語にこだわってみた。この語はギリシャ神話の芸術の女神ミューズを起源とするという。ミュージックも同源だ。この女神達の母はムネーモシュネー、即ち「記憶」の女神。したがって「記憶は芸術の母」という格言のような言葉を思い出したりもした。

日本では博物館、美術館、資料館などと呼んで内容をある程度区別した使い方をしているが、英語圏ではMUSEUMである。つまり、記憶すべき芸術的価値あるものを系統的に組織的に陳列する所という概念が基本となるのであろう。すると、系統を具体的に示す特定された博物館名が俄然興味深く思えてきた。

そこで今回のMUSEUM探訪はJagd-und Fischerei Museum（狩猟と漁猟の博物館）をマークして出かけてみた。なんといってもわかりやすいネーミングのMUSEUMだ。ナマズの彫刻が入り口の目印。入って驚いた。鹿の頭部の剥製が部屋の壁の両面にずらりと並んでいる。圧倒されるばかりだ。レジデンツ一棟三階分を一階は小動物、二階は魚鳥類、メインの三階はかつて舞踏会が開かれたかと思うほどの広いスペース。ここに鹿、猪、熊など大型の獣類の剥製および角の加工品・装飾品などがあり、圧巻は狩猟道具、特に装飾をほどこした猟銃のコレクション（1500年代以降およそ200丁）は、この地の狩猟が文化であったことを感じさせるに十分な説得力があった。

また、広い階段の壁面には、貴族達の鹿狩り・狐狩りの様子を示す油絵が多く集められ、MUSEUMの収集品が絵画の中で自然説明されていることに気付かされて興味はいっそう増してゆく。２階の釣りのコーナーも充実している。漁猟のための道具のコレクション（釣針から釣竿・篭など）は美しい。人間と魚との知恵くらべを示す道具の数々である。

狩猟と漁猟の博物館

ほぼ二時間ほどを過ごして快い充実感を味わった。そして考える。興味をそそられる博物館の魅力と条件は何だろうと。

たとえばこのMUSEUMで感じられたことは徹底したサービス精神のように思える。簡単にいえば分かりやすいということなのだが、どのような方法によって分かりやすくするかは、企画する側の想像力のように思える。博物館に陳列される資料の一つ一つはかけがえのない貴重品としての魅力を発揮し、そのものへの愛情・愛着は所持する側の誰もが有していることだろう。それを時代に還えし、人々との生き方の中に位置づける。こうした学術的な作業を経て我々の目に触れる機会を持っているわけだが、その場を観るだけのものとするだけではない知的工夫こそが、たぶん求められているプラスα部分なのであろうと思ったものだった。

（文学部教授）

卒業制作展に想う

秋田貴廣

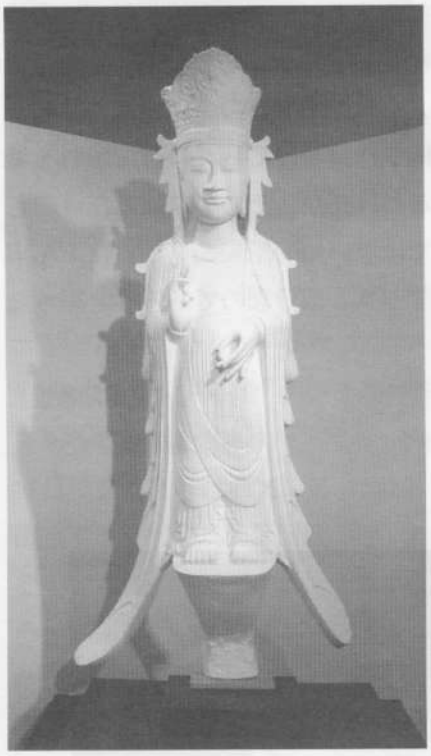
昨年の十二月に立正大学博物館で開催された『立正大学仏教学部　卒業制作展－仏教美術の「存在」に遭う－』には、これまでの卒業制作作品の内から二十点が出展された。私は企画者でもあるが、客観的に見ても、作品のヴァリエーションと精度、趣旨という点において、他に類を見ないユニークな展覧会であったと思う。現時点の集大成としてこの展覧会を企画し準備する中で、私は「これは達成といえるのだろうか」などと考えながら、これまでのことをその時々の映像とともに思い返していた。

あの日―　私がはじめてこの大学で仏像の彫刻実習授業を行い始めた四月、窓の外は全面桜色だった―、学生たちははじめてのことに戸惑いながら、少し恥ずかしそうに自分の仏像を造った。思いのほか上手くいかないことに苛立ったり、一応出来たものの気に入らなくて造りなおしたり、人によって反応はいろいろであったが、そのまなざしはみな澄んでいて、かたちの発見に嬉々としていたことを憶えている。

これは今も変わらない。立正大学は美術大学ではないのでデッサンの修練も彫刻造形の経験もない学生が大半であり、彼らにとって仏像の実習授業はかなり新鮮な体験なのだ。知識も経験もない者にとって、彫刻造形とは、ひたすらに自分の眼に映っているものをどのように把握するかにかかっている。そしてその純度が高いために、作品たちには、手馴れた作品にはない一回性の美学というべき特有の存在感が宿っている。

東大寺法華堂伝月光菩薩立像模刻
―天平彫刻の造形性研究―
加藤浩晃

「卒業制作」は、実習による文化研究の試みをさらに推し進めるものとして、平成10年度の卒業生から導入された制度である。「卒論」に代わり



飛鳥時代にみられる神秘的造形性について
―法隆寺金堂釈迦三尊像左脇侍像の模刻制作―
三上洋次

「彫刻」であるための成立要件について
―生命観の立体的表現に関しての考察―
田中一穂

得る制作と研究とするにはそれなりの精度が要求されるのは当然であったが、造形美術の専門教育を受けていない学生にどれ程のことが可能なのか、はじめはまさに模索する日々であった。しかし、われわれが目指した、「古典作品のかたちに対して、自らの眼と身体を投与しつつ探り出し、吸収し、再構成しながら表現し、その必然性を追体験する」という試みそのものは、手前味噌を引いてみても文化研究の一手法としてとてもユニークであった。また、古典作品の美術としての深みに直に触れることは、きっと学生の潜在的な可能性を引き出してくれる、という妙な確信もあった。それはかつての私自身の歩みでもあったからである。

「卒業制作」は、主に古典作品の「模刻」という形態をとる。それは真似て造るということであるが、優れた彫刻作品を真似て造るなどということは、本来、作者と同じほどの技量をもってしても難しく、経験のない者にとっては至難の業に等しい。「模刻」は、対象である古典作品の造形性を吸収し、再構成することでしか対象に近づくことができないのである。この「吸収」と「再構成」の繰り返しによって、学生は少しづつ、かつてその像を造った人間の感性に自分自身の感性を重ね、そうすることで「模刻」は直接的に「かたち」の必然を探る試みとなる。

今あらためてかつての作品たちを見ていると、それぞれの制作者が、自らの眼が見ている「存在」に対して、その「美」に対して、それを表現できる程に何とか理解しようと食い下がっている姿が重なってくる。

結果として彼らはこちらの期待に応え、この試みの意義と可能性を形にするとともに、いわば素人でもここまで出来るということを実証してくれた。そして、経験に乏しい者がどうしてここまで出来たのか、短期間にここまでの力をいかに得る事ができたのか、その心的過程をより詳細に見極める課題を、あらたにわれわれに突き付けているように感じる。

これをより深く理解することが、今後の教育と研究の展開に道を与えてくれるにちがいない。今度はこちらが尻を叩かれる番かもしれない。

（仏教学部助教授）

展示資料の背景（4）

古墳時代の資料

坂誥　秀一

（1）東京都芝丸山古墳出土の埴輪

東京都港区芝丸山古墳群は、明治30（1897）年に坪井正五郎博士によって調査され、前方後円墳1基・円墳10基以上から構成されている。その後、昭和33（1958）年には後藤守一博士などによって円墳が発掘され東京都の史跡に指定されている。この古墳群から出土した人物埴輪の頭部が古くから（大正～昭和の前半）立正大学に所蔵されている。付近の日蓮宗寺院住職（卒業生）の寄贈品と伝えられていた。この資料はごく一部の人達によって語り伝えられてきたが、公表されたのは坂誥秀一『日本の古代遺跡32　東京23区』（昭和62年保育社刊）の巻首カラー図版であった。

（2）千葉県塚原古墳群

塚原古墳群は、千葉県八日市場市吉田に存在する前方後円墳1基を含む円墳40基以上から構成されている。

昭和34（1959）年の暮れに武越慈寛氏（故人・当時立正大学庶務部長）を通して金蓮寺（八日市場・入山崎）の裏山畑地に存在する古墳を調査しないかと誘いがあった。早速にお引受けし、翌年2月の下旬に前方後円墳1基・円墳5基と竪穴住居跡2軒を発掘した。前方後円墳（全長35m、後円部径15m、高さ3.2m）の後円部から粘土の主体部が検出され、滑石製扁平勾玉1点などが出土し、その直下から壺形の土師器が粉砕された状態で発見された。そして周囲には手捏の模造土器5点が置かれていた。さらに、主体部の下を築造当時の地表面まで掘り下げたところ、焼土が検出され、それに伴って手捏土器2点と土師器片が見出された。古墳築造に伴う祭祀の痕跡として稀有の例であった。また、円墳からは、4号墳―直刀1・刀子2・銀環1・青銅釧2・管玉3・小玉10数点・5号墳―直刀残片が出土した。一方、前方後円墳の前方部の築造以前の層から粘土製カマドを伴う竪穴住居跡が検出され、土師器の甕が出土し、さらに前方後円墳の西20mの地点から土師器〈「矢倉台式」〉を伴出する一辺5.5mの正方形竪穴住居跡が発掘された。概要は、坂誥秀一「千葉県塚原古墳群の調査」（『古代文化』4―3）と題して紹介した。なお、前方後円墳築造の祭祀痕跡については、後日、「古代日本人の死後感」（『大法輪』47―10）として論じたことがある。

（3）埼玉県野原古墳群

野原古墳群は、埼玉県大里郡江南町野原に存在する前方後円墳を含む古墳群で、とくに踊る埴輪の出土によって知られている。

昭和38（1963）年の夏、梅山信太郎氏（故人・当時立正大学学園常任理事）に呼ばれた。大学が埼玉県に新校地を求めたので、校地を含めた付近一帯で考古学の調査をしないか、とのことであった。立正高校時代に商業の教師であった梅山先生のご下命のこととて直に付近を踏査し、新校地の一部から土器片を採集して遺跡存在の可能性を報告し、あわせて至近地に存在する野原古墳群の一部を発掘したい、と返答した。新校地内の発掘は、新しい建物の建築の際とし、野原古墳群の調査を実施することに決定した。あくる年の春、円墳6基を発掘し、直刀・刀子・鉄鏃・金環などの副葬品及び埴輪片・土師器・須恵器を発掘した。報告書については未刊（図版の作成はスミ）であるが、概要については、「埼玉県大里郡野原古墳群の調査」として日本考古学協会第31回総会（昭和40年5月）において発表した。

（4）祭祀遺物など

昭和30年代前半、千葉県君津郡荘台（かざりだい）、印旛郡天南廟山（てんなんびょうやま）の2祭祀遺跡を発掘した。荘台は石製模造品、天南廟山は土製模造品を出土する開地の祭祀遺跡であった。前者については、坂誥秀一「千葉県君津郡荘台出土の祭祀遺物」（『銅鐸』14）、後者については同「千葉県天南廟山祭祀遺跡」（『立正史学』23）として発表した。

（本館館長・文学部教授）

展示資料の背景（5）

歴史時代の資料（付、外国）

坂誥　秀一

（1）千葉県長熊廃寺跡

昭和26（1951）年～27（'52）年にかけて立正大学考古学会により千葉県印旛郡和田村（当時）の古瓦出土地が発掘され、その地が古代の廃寺跡であることが確認された。以来、所在地の字をとって長熊廃寺と呼ばれている。当初「白鳳様式瓦を出土する法起寺式伽藍配置の寺」と考えられたが、その後の調査と検討により、瓦葺きの土壇を有する一堂宇を中心として奈良時代に造営された寺院跡と考えられた。鐙・宇・男・女瓦のほか、瓦塔・墨書土器が出土した。鐙瓦は素縁素弁八葉文・二重圏素弁八葉文・菊花文様蓮華文の３種、宇瓦は均正忍冬唐草文・並行連珠文の２種の出土が報告された。報告は、久保常晴・丸子　亘ほか「千葉県印旛郡長熊廃寺址発掘調査報告」（『銅鐸』９）として発表された。

（2）古代窯跡出土資料

文部省科学研究費の交付をうけて行った東日本における古代窯跡の調査及び東日本における須恵器の編年的研究の成果の一としての発掘資料である。発掘調査を実施した北限の須恵器窯跡（前田野目・持子沢－その後の調査により分布が拡大し、現在は五所川原窯跡と称されている。国指定史跡）、日本海に面する山形の須恵器窯跡（鶴岡市の荒沢・町沢田）、群馬（藤岡）の上野国分寺の造瓦窯跡（金山）、同じく上野須恵器の一様式の一括資料を提供した（桐生）上小友須恵器窯跡、武蔵国分寺の創建瓦と同時代の須恵器窯跡群（埼玉・南比企の窯跡群－新沼・虫草山・能瀬が沢・宮ノ前・山田など）、同じく再建瓦と同時代の須恵器窯跡群（埼玉・東金子の窯跡群－新久・八坂前・谷津池など）、東京の南多摩の窯跡群（天沼など）、古代御牧との関係を示す千曲川流域（長野）の窯跡群（御牧ノ上・八重原など）、天龍川流域（長野）の宮洞窯跡などの発掘資料であり、また、下野薬師寺の造瓦窯跡（乙女、国指定史跡）の資料など、東日本各地の古代窯跡出土資料が含まれている。このほか、九州・牛頚の須恵器窯跡（平田など）と中国・広島の青水須恵器窯跡出土の資料を含み、古代の須恵器・陶硯及び瓦塼・瓦塔屋蓋などの発掘資料である。これらを陳列替えしながら公開している。報告書としては、『津軽・前田野目窯跡』『武蔵・新久窯跡』『武蔵・八坂前窯跡』『南比企窯跡群』『上野・金山瓦窯跡』『筑前・平田窯跡』などとして発表している。

以上、（1）と（2）が立正大学が主体的に発掘した資料の展示であるが、そのほか、古代の骨蔵器・瓦經・瓦塔・泥塔、中世の板碑、近世の礫石経、近代の耐火煉瓦など、古代から近代にいたる多くの考古学的資料が収蔵され、それらについて適宜、陳列されている。

（付　外国）

外国の資料としては、カピラ城跡比定地－テイラウラコット遺跡（ネパール）出土の資料がある。釈迦在世時代の北方黒色磨研土器（N・B・P・W）を中心に、テラコッタ・石製品・装身具類・コインなどの発掘資料が収蔵されている。また、中国・唐－宋代の俑、石仏、瓦など、太平洋戦争以前に寄贈された資料もある。

このほか、眞鍋孝志氏（日本古鏡研究会会長）が寄贈された「撫石庵コレクション」の梵鐘及び仏教関係資料が一括所蔵されている。

以上、５回にわたり紙幅の許す範囲で、私が見聞してきた「展示資料の背景」の一端について紹介してきた。これらを含めた所蔵資料の細目については、近い将来『立正大学博物館所蔵資料目録』として公けにされるであろう。

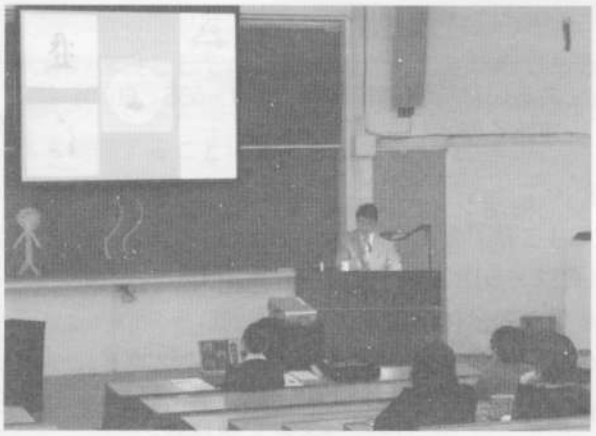
（本館館長・文学部教授）

NEWS

第2回特別展

◆10月25日（月）～ 11月27日（土）
「釈迦の故郷」（後援；(財)全日本仏教会）
記念講演会
日　時　11月13日（土）13：30～15：00
会　場　立正大学熊谷校舎1号館1107教室
演　題　「釈迦の遺跡を掘る
〈カピラヴァストゥとルンビニー〉」
坂詰秀一（本館館長・文学部教授）

◆12月6日（月）～ 12月18日（土）
「立正大学仏教学部　第1回卒業制作展
―仏教美術の「存在」に遭う―」
記念講演会
日　時　12月11日（土）13：00～14：30
会　場　立正大学熊谷校舎1号館1107教室
演　題　「仏教学部における実習授業と
卒業制作の取り組み」
秋田貴廣（立正大学仏教学部助教授）



記念講演会の様子

来館者数

10月1日（金）～ 3月15日（火）
来館者数　1,540名
一般・学生来館者

10月	327名	11月	630名	12月	491名
1月	32名	2月	27名	3月	33名

来館者往来

〔高等学校〕群馬県西邑楽高校・栃木県足利南高校・茨城県総和高校・埼玉県鴻巣高校・吉井高校・埼玉県本庄第一高校・埼玉県行田新修館高校・埼玉県立北本高校・埼玉県川口総合高校・埼玉県立蓮田高校・埼玉県熊谷市立女子高校・上等高校・新潟県十日町高校（計13校）
〔団体〕熊谷市制モニター一行・彩の国いきがい大学熊谷学園・熊谷市学校長会一行・北部地区教育長会議一行（計4団体）

出版物

立正大学博物館では平成16年度下半期にかけて、下記の刊行物を発刊した。
・第2回特別展展示図録『釈迦の故郷』（平成16年10月刊）
・『万吉だより』第3号　（平成16年12月刊）
・企画展展示図録『立正大学仏教学部卒業制作展 ―仏教美術の存在に遭う―』（平成16年12月刊）
・『立正大学博物館年報』3　（平成17年3月刊）

普及と活動

第2回特別展の紹介
・11月1日（月）『全仏』（(財)全日本仏教会刊）
・11月11日（木）『週刊仏教タイムス』

資料の貸出し

・10月8日～12月22日　品川区立品川歴史館
新久窯跡出土文字瓦1点
・12月6日～1月31日　さいたま市立博物館
花輪台貝塚第4・5号住居跡出土縄文土器片29点

見学者の声

立正大学博物館では、来館者の皆様の意見を反映するためメッセージ箱を備えております。下記のご意見は多数寄せられたものから事務局で選択させて頂いたものです。貴重なご意見、ありがとうございました。今後の博物館運営に役立たせていただきたいと思います。

・「釈迦の故郷」を見に来ました。前からティラウラコット遺跡の遺物は世界でここしか見られないと聞いていましたが、今回展示資料も増えとても勉強になりました。　（県内・本学生・21歳男性）

・第２回特別展をみて自分の大学がこんなにすごい発掘をしていたと聞き少し嬉しくなりました。
（県内・本学生・20歳女性）

・ネパールの遺跡やインドの御釈迦様に関連する遺跡は見てきましたが、こんなに自宅から近い所でものが見られるとは思いませんでした。
（県内・一般・60代男性）

・第２回特別展をみにきました。ビデオ放映をされていて、さらにわかり易く理解が深まりました。
（県内・一般・28歳男性）

・「釈迦の故郷」を見に来たのですが、他にもいろんな展示物がありおもしろかったです。TBSの「世界遺産」で取り上げられていたとは知りませんでした。わかり易く良かったです。（県外・一般・30代女性）

・仏教学部の卒業制作展をみて、自分の大学でこんなこともやっているんだなぁと思いました。作品も素晴らしかったです。　（県内・本学生・20歳女性）

・仏教学部の卒業制作展は学園祭の時にも見たのですが、改めて見る機会があり良かったです。
（県内・本学生・22歳男性）

・特別展を見に来たのですが、せっかくチラシをもらっても地図がついていないので来るのに大変でした。大学までの地図を掲載してもらいたいです。
（県外・一般・50代男性）

・特別展の機会に一度足を運んでみようと思い来ました。鐘にもいろんな種類があり面白かったです。卒業制作で仏像などを作っているとは知りませんでした。　（県外・一般・60代男性）

利用案内

所　在　地：〒360－0161
埼玉県熊谷市万吉1700
立正大学キャンパス内
TEL　048－536－6150
FAX　048－536－6170

開　館　日：月・水・木・金・土曜日
（大学休業中を除く）

開 館 時 間：10：00～16：00

＊火・土・日・祝日、及び大学休業中（夏・冬・春期休暇等）に開館を希望する人は、事前に博物館あるいは総務部総務課（048－536－6010）にご連絡ください。

交通機関：・JR高崎線（上野から55分）、上越・長野新幹線（上野から35分）、「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス（国際バス）で約10分。
・東武東上線（池袋から56分）「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス（国際バス）で約12分。

あとがき

第４号をお届けします。お蔭様で博物館の来観者も増加し、沢山の皆さんが、いろいろと声を掛けて下さっています。学生諸君が立ち寄ってくれるのもうれしい限りです。「撫石庵コレクション」の更らなる活用のため、あちこち見学に歩きながら“梵鐘”の研究を続けています。そのため『館報』の刊行も遅れ気味ですが、内田勇樹君の手伝いにより刊行することができました。お礼申します。　（上野）

題字揮毫　田 淵 観 斎 氏　（立正大学名誉教授）

立正大学博物館館報　万吉だより　第４号
平成17（2005）年３月31日発行
編集・発行　立正大学博物館
〒360－0161　埼玉県熊谷市万吉1700
TEL　048－536－6150
FAX　048－536－6170
Email：museum@ris.ac.jp
http://www.ris.ac.jp/museum/index